

看護基礎教育における教授方法の工夫
——母性看護学領域における演習科目の授業展開——

中島久美子・早川有子

群馬パース大学紀要第14号別刷

2012年9月

その他

看護基礎教育における教授方法の工夫

——母性看護学領域における演習科目の授業展開——

中島久美子¹⁾・早川有子¹⁾

For Better Teaching Methods in Basic Nursing Education

——How to Teach Nursing Skills in Maternal Nursing Practice——

Kumiko NAKAJIMA¹⁾, Yuko HAYAKAWA¹⁾

キーワード：母性看護学、演習科目、教授法、基礎看護教育

I. はじめに

母性看護学実習では、妊娠・分娩・産褥及び新生児を総合的に捉え看護過程を展開することを目的としている。また、母子の特性を理解し、看護に必要な基礎的实践能力を養うことが重要である。そのため、2週間という短期間に効果的な学習を図るためには、学内での演習において、臨地実習での学びを深化できるような教授方法の工夫が求められる。母性看護学の演習に関しては、各大学で臨地実習の学びを深める効果的な演習について報告されている^{1,2)}。また、疑似体験による妊婦健診や褥婦の看護を実施する等の演習の取り組みが、対象の身体的・心理的・社会的側面の理解と基本的な看護技術の体験に繋がり、学生の学習課題が明確になったと報告されている²⁾。このように母性看護学の演習は、臨地実習前の準備として学生の知識や技術の学習に繋がると考えられる。よって、演習科目の授業内容を検討し、効果的な教授法を検討することは、臨地実習前の学生の課題の明確化と実習への不安軽減となり意義があると考えた。そこで、本学における母性看護学の演習科目を振り返り、母性看護学の演習科目の授業展開から効果的な教授法のあり方を検討したので報告する。

II. 演習科目の概要

1. 母性看護学IIの概要

母性看護学IIは専門科目群であり、母性看護学領域の講義・演習科目として3年次前期に2単位30コマが開講される。科目の目的は、妊娠・分娩・産褥期及び新生児期における母子の身体的・心理的・社会的変化を理解し、母性看護の特徴と看護の役割について考え、母性看護に必要な基礎的知識・技術を学ぶことである。教授方法は講義と演習であり、授業全体に占める演習の割合は、1/3である。演習は、看護の思考過程を学ぶ看護過程の演習と看護技術を実施する実技演習の主に2つである。看護過程の演習は、紙上事例を用いて産褥期の母子1事例を対象に、情報の収集から計画立案に至るまでの、個別・グループ学習を合わせた学習方法である。授業の最後に集中して6コマが開講される。実技演習は看護技術の学びが臨地実習での看護の実践へと深まるように演習項目を選定し、妊娠・分娩・産褥期及び新生児期の母子の特性に合わせた看護技術で構成され、講義と演習がセットの学習方法である。看護技術は妊娠期・分娩期と産褥期・新生児期の2回、各々4コマが開講される。母性看護学IIの授業日程を表1に示した。

2. 母性看護学IIにおける演習の授業展開

1) 看護過程の演習(表2)

看護過程の演習では、講義で予め母性看護学特有の

1) 群馬バース大学保健科学部看護学科

表1 母性看護学Ⅱの授業日程 平成24年度開講(前期)

コマ数	講義・演習題目	
1	ガイダンス	
2		
3	妊娠の経過とその看護、ハイリスク妊娠 妊婦の心理・社会的側面のアセスメント	
4		
5		
6		
7		
8	分娩の経過とその看護、異常分娩 産婦の心理・社会的側面のアセスメント	
9		
10		
11	実技演習【妊娠期・分娩期の看護技術】	2コマ
12		
13	褥婦の経過とその看護 褥婦の心理・社会的側面のアセスメント	
14		
15		
16	新生児の経過とアセスメント 健康障害のある新生児	
17		
18		
19	不妊治療とその看護	
20		
21	母乳育児支援	
22		
23		
24	実技演習【産褥期・新生児期の看護技術】	2コマ
25	看護過程の演習	
26		
27		
28		
29		
30		
回		6コマ

* 1回の講義は90分であり、2コマ(180分)で開講される
* 太枠は演習を示す

ウェルネス思考を学んだ後、産褥期の母子1事例に焦点を当て、学生個々が事例に取り組みアセスメントを実施する。この際、産褥期は妊娠・分娩期の母子の経過が影響していることを理解できるように、妊娠・分娩期の情報の収集とアセスメントについても演習している。

その後、5～6名の小グループ間で話し合いを持ち、対象の個性を活かした看護計画の立案を行い、最終日に看護計画を発表し合う。教員は、学生が情報の収集からアセスメント、健康課題の抽出において、看護の焦点からずれていないか、計画の一貫性があるか等を随時、確認・補足をしながら学生の理解が深まるよ

うに教授している。また、教員3名でグループ間を巡回しながら学生の質問にその場で対応している。紙上事例は複数の臨床事例を組み合わせ、妊娠経過、分娩記録、産褥・新生児期の経過記録と褥婦の心理・社会的側面に関する資料を作成し使用している。また、学生が臨地実習で短期間の間に情報の整理とアセスメントができるように実習施設の記録用紙を使用している。

母性看護学の対象は正常な経過の母子とその家族であるため、母性看護学のアセスメントの視点は、看護上の問題を探るのではなく、看護上の健康課題を明確化することである³⁾。例えば、妊娠・出産体験や健康課題に対する対象の反応などから明らかにした、看護として解決すべき課題を表現することが重要である。母性看護学実習では疾患を持つ患者を対象としないことから、実習で初めて母子を受け持つ学生は、ウェルネス思考の看護過程に戸惑いを抱くことが懸念される。そこで、演習の場で紙上事例を用いて母性看護のアセスメントの視点、健康課題の抽出と計画立案のプロセスを学ぶことにより、臨地実習における対象に合わせた看護を提供するための思考過程が学習できると考える。

2) 看護技術の実技演習(表3)

母性看護学に必要な看護技術は、演習や体験を通して理解することが重要である。看護技術の実技演習は、母性看護学実習において看護の実践に活用できるように、厚生労働省および文部科学省が定めた看護基礎教育のカリキュラムに基づき、「全員が到達すべき項目」、「機会があれば到達する項目」を中心に看護技術の項目が選定されている⁴⁾。

妊娠期の実技演習は、正常経過をたどる妊婦と胎児の健康状態のアセスメントをする上で重要な「腹部・子宮底長の計測」と「レオポルド触診法」及び「胎児モニタリングの装着と判定」である。分娩期の実技演

表2 看護過程の演習の授業展開

平成24年度開講(前期)

開講日	X時限	Y時限	「課題」
7/A(火) 25・26回	* ウェルネス思考の看護過程の説明・グループ編成 * 紙上事例の紹介 * 情報整理・アセスメントの視点・記録の説明	○一般背景・妊娠・分娩期記録の情報の整理・アセスメント [個別整理⇒グループ意見交換]	・「課題1」一般背景・妊娠・分娩期までの情報の整理とアセスメント
7/B(火) 27・28回	* 前回「課題1」の確認、アセスメントの補足・説明 ○産褥経過の情報の整理・アセスメント [個別整理⇒グループ意見交換]	○新生児経過の情報の整理・アセスメント [個別整理⇒グループ意見交換] ○看護計画の健康課題の根拠の抽出	・「課題2」産褥経過・新生児経過の情報の整理とアセスメント ・「課題3」看護計画の立案
7/C(火) 29・30回	* 前回「課題2」の確認、アセスメントの補足・説明 ○看護計画 (看護方針・健康課題の根拠・看護目標の抽出) [個別整理⇒グループ意見交換]	○看護計画の修正 [グループ意見交換] ○グループの看護計画の成果発表 * 講評	

・*は教員の行動、○は学生の行動を示す。
・「課題」は当日内に終えなかった記録であり、学生個別に次週までの提出期日とする。

表3 看護技術の実技演習の授業展開

平成24年度開講（前期）

[妊娠期・分娩期の看護技術]				
開講日	時間	第1ブース	第2ブース	第3ブース
5/D(火) 11・12回	13:00-13:50	妊婦の計測・レオポルド触診法	産婦の看護(分娩第1期の看護)	胎児モニタリングの装着と判定
	14:00-14:50	胎児モニタリングの装着と判定	妊婦の計測・レオポルド触診法	産婦の看護(分娩第1期の看護)
	15:00-15:50	産婦の看護(分娩第1期の看護)	胎児モニタリングの装着と判定	妊婦の計測・レオポルド触診法
[産褥期・新生児期の看護技術]				
開講日	時間	第1ブース	第2ブース	第3ブース
7/E(火) 23・24回	13:00-13:50	褥婦の看護・育児支援	新生児のフィジカルアセスメント	新生児の沐浴
	14:00-14:50	新生児の沐浴	褥婦の看護・育児支援	新生児のフィジカルアセスメント
	15:00-15:50	新生児のフィジカルアセスメント	新生児の沐浴	褥婦の看護・育児支援

- ・1グループあたりの学生数は5・6名、計16グループである。
- ・1ブースあたりのグループ数は、5-6グループが配置される。
- ・教員は各ブースに1名、計3名で指導にあたる。

習は、産婦役と看護師役、夫・家族役など、グループ毎に配役を決め、フリースタイル分娩のシミュレーションを通して「産痛緩和法」と「呼吸法」を実施している。

産褥期の実技演習は、退行性変化の観察とアセスメントを強化するため「子宮復古や悪露の観察とアセスメント」を実施している。また、進行性変化の観察とアセスメントでは「乳房・乳頭の観察とアセスメント」を行い、母親にとって子育てが楽に行えるような授乳援助が実施できるよう、学生がペアになり「授乳時のポジショニングとラッチオン」を実施している。新生児期の実技演習は、臨地実習で特に重要な「新生児のフィジカルアセスメント」と「沐浴」である。これらの実技演習では、看護技術に合わせて数種類のモデル人形や模型、器具や道具を活用している。

看護技術の実技演習は、事前に開講された妊産婦・褥婦及び新生児の特性と看護を講義で学んだ後、5～6名の小グループ毎に3カ所の演習ブースを順番に回り、各演習ブースの看護技術を演習する。演習後は看護技術の理解を深めるため、演習の考察や質問等の記録を提出する。教員は3カ所の演習ブースに分かれて、担当した看護技術の解説とデモンストレーションを行い、学生が適切な方法で安全に看護技術を実施できるように指導する。また、臨地実習では、産褥期の母子を受け持つ病棟実習と妊婦健診や不妊外来等の外来および分娩見学を選択する選択実習が週毎に組まれている。その点を考慮し、病棟担当の教員が産褥期の看護技術を担当し、選択実習担当の教員が妊娠期の看護技術を担当するというように、実技演習を担当した教員が臨地実習での担当と概ね一致するように配置され、実技演習と臨地実習との指導法の一貫性を図って

いる。また、実技演習は、実習初日のオリエンテーション日と学内演習日の2日間、演習室を開放して学生個々の技術演習を強化する機会を与えている。

III. 演習科目の評価と課題

1. 看護過程の演習科目の評価と課題

看護過程の演習は、学生個々が事例から情報収集とアセスメントを実施し、その後グループ学習により健康課題の抽出といった一連の思考プロセスを踏まえて、個別性のある計画立案が実施できるよう取り組んでいる。個々の学生の取り組み姿勢やアセスメント能力にバラつきが見られるものの、グループ学習による計画立案と成果の発表により、学生間で学びを共有している。これにより、グループ全体のアセスメントや看護計画の質が向上し、ボトムアップの効果が期待されると考えられる。課題としては、看護計画の立案が実習で受け持つと想定される産褥期の母子1事例に限定されているという点である。今後は、看護計画の立案を妊娠・分娩期などの時期に焦点を当てること、また、初産婦・経産婦など多様な事例を提示することにより学生のアセスメント能力の向上を図りたい。

2. 看護技術の演習科目の評価と課題

看護技術の実技演習は、母性看護学実習に活かせるように、妊娠・分娩・産褥期および新生児期にそれぞれ必要な基礎的看護技術の演習を実施している。よって、実技演習後に提出された学生の考察の内容から、実技演習を検討したい。まず、妊娠期の実技演習の学びでは、妊婦の腹部の計測・レオポルド触診を実施する際には、妊婦への声掛けと羞恥心の配慮を行うこと

が重要であるという学びが多かった。また、胎児モニタリングでは、モニター装着時の妊産婦の体位を考慮して低血圧症候群に注意すること、胎児心拍の判定としては根拠を持って胎児の健康状態をアセスメントすることが重要であるという学びが多かった。分娩期の実技演習では、分娩第1期の産婦の産痛緩和のマッサージの演習を通して予想以上にマッサージの力が必要であるということ、産婦の安楽な体位の工夫と産婦の呼吸に合わせた声掛けの重要性が理解できたという意見が多かった。

産褥期の実技演習では、褥婦の経過に応じた子宮底の高さと硬度について正常と異常の違いを理解できた、外陰部の観察では羞恥心への配慮と外陰部の清潔保持について褥婦のセルフケアを確認するためには良好なコミュニケーションが重要であるという学びが多かった。また、授乳時の乳房・乳頭の触診、ポジショニング・ラッチオンの観察とアセスメントの重要性について、授乳時の身体的負担や安楽な体位の工夫について学んだという意見が多かった。新生児期の実技演習では、新生児のフィジカルアセスメントや沐浴の意義と注意点を理解できた、実習までに新生児の観察の視点や沐浴の手順を身につけたいという意見が多かった。これらの学生の学びの考察から、学生は実技演習を通して母性看護学領域において必要な知識と看護技術を理解し、対象とのコミュニケーションや羞恥心への配慮といった看護において重要な態度を学習していると考えられた。

一方、演習を通して理解できなかった、不安が残ったという意見としては、妊娠・分娩・産褥期に一貫して、実際の妊婦・産婦・褥婦ではどの位の力で触診やマッサージをしてよいか解らない、演習では理解できても実際に正確な測定とアセスメントができるか不安になった、実際の新生児ではスムーズに沐浴ができるか心配になったという意見があった。これらの学生の意見から、看護技術の実技演習を一通り経験するだけでは、学生の看護技術の不安は解消されないことが予測された。よって、実習前に学生個々が繰り返し実技演習に取り組み、看護技術力の習得と看護判断力を

強化することが求められると考えられた。

以上、実技演習終了後の学生の考察から看護技術の理解度が明確になり、本学における実技演習の内容は、臨地実習前の学生の準備として、母性看護学実習において基本的な知識と看護技術、態度の学びに繋がっていると考えられた。しかし、学生個々の看護技術の達成度については評価しておらず、学生の看護技術力や看護判断力を強化し、実習への不安軽減を図るためにも OSCE（客観的臨床能力試験）等を取り入れ、基本的な看護技術を客観的に評価することが求められると考えられた。

IV. おわりに

本学における母性看護学の演習科目を振り返り、演習科目の授業展開から効果的な教授法のあり方を検討した。今後は、産褥期以外の時期の設定や属性を広げた紙上事例を活用し、学生のアセスメント能力の向上を図るとともに、実際の臨地実習で必要とされる看護技術の客観的評価を取り入れていく必要がある。また、学生の臨地実習における困難や演習で学びたかった点など、学生の視座から調査し、講義と演習が臨地実習に活かされるような演習方法の効果的な教授法を工夫していきたいと考える。

文 献

- 1) 廣門三千子・岡田佐枝子：看護実践能力の向上を目指す新カリキュラム—各領域看護学演習の展開—。看護展望 34(12)：2009：80-88。
- 2) 片倉裕子・小堀ゆかり：疑似妊婦体験学習と母性看護学実習で学んだ妊婦理解の検討。母性衛生 53(3)：2012：317。
- 3) 森 恵美：母性看護に必要な看護技術（第4章）。母性看護学概論 医学書院、東京：2012：142-170。
- 4) 早川有子・中島久美子：母性看護学領域における基礎看護技術教育の現状と課題。群馬パース大学紀要 10：2010：75-82。